

# リンダ フィッツジェラルド アイルランド出身の元カトリック信者 (1/4)

説明： 孤独感

から人生の新たな一步を求めていたリンダは、サウジアラビアでの仕事を引き受けます。

よりリンダ フィッツジェラルド

掲載日時 12 May 2014 - 編集日時 12 May 2014

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

## まえがき

リンダ フィッツジェラルド（ムスリム名ハディージャ）は、アイルランドの首都ダブリン近郊のウィックローという街の出身です。彼女の家庭は非常に厳格なローマ カトリック信徒で、9人の兄弟姉妹がいます。彼女の父親は電気技術者で、母親は主婦をしています。



リンダはウィックローで義務教育を終え、秘書養成学科に進み、その後ダブリンで9年間に渡って働いていました。

現在ハディージャと呼ばれている彼女は、サウジアラビアに渡航してイスラームに改宗しました。この記事で、彼女は聖地を訪れ正道に導かれた経緯を語ります。彼女に神の祝福がありますように。

## 私がどのようにしてサウジアラビアにやって来たか

私は若者の社交クラブに入っていました。彼らは毎週月曜日にミーティングを行い、その後パブに行っていました。私自身も時々彼らとパブに行きましたが、ほとんどはミーティング後に帰宅していました。ある夜、クラブに新しい女の子が入ってきたので、パブに行っ彼女と会話し、歓迎することにしました。すると彼女はサウジアラビアに人材を派遣する業者で働いているということが分かりました。彼女は沢山のことを教えてくれ、私はそれに魅了されてしまいました。それ以前、サウジアラビアのことは殆ど聞いたこともありませんでした。夜がふけるにつれて、私はさらに興味を持ち、パブを出る頃にはすっかりサウジに行きたくなってしまっていました。

1993年のその年、私はある仕事に応募しましたが、採用には至りませんでした。その後しばらくはその事を考えなくなりましたが、クリスマス休暇を実家で過ごした私は停滞感にとらわれ、人生で何か違うことをしなければならぬと決意しました。友人たちは皆ボーイフレンドや夫を持ち、異なる物事を始めていました。急に私は自分には何のしがらみもないこ

とに気付きました。クリスマス後に都市部に戻ってきた私は、人材派遣会社の例の女の子を訪れ、サウジアラビアの仕事を見つけたら何でもいいから紹介してくれと頼んでいました。彼女はこう言いました。「信じられないかも知れないけど、ついさっき公安部隊病院が秘書を募集するファックスが来たのよ。」1994年の3月15日、私はここサウジに来ていました。

## イスラームに対する第一印象

サウジアラビアに行くと、他の欧米人たちが最初に教えてくれるのは、いかにムスリムたちがとんでもない人々かということで、彼らが女性たちに酷い仕打ちをし、礼拝所に行ったきり何時間も戻ってこず、そしてバーレーンで飲酒や女遊びに明け暮れていることなどに関してでした。このようにして最初から偏見を持たされるのです。そしてそれがイスラームだと思い込まれます。しかし、それはイスラームではありません。不幸にも、大半の欧米人たちはそのことに気付かないのです。

## いかにその偏見を脱することが出来たのか

私にとっては、最初から興味津々でした。モスクで人々が礼拝しているのを見ると、私はそのような神への強い信仰を持てることは素晴らしいことだと思いました。そこでは床にリーフレットが置かれていたため、拾いあげて読んでみたりもしましたが、欧米の友人から「そんなものを読んでどうすると言うの？彼らはあなたを洗脳したいだけなのよ」と言われ、恥ずかしくなって止めてしまいました。その後私はアラビア語のレッスンを受け始めましたが、教師のエジプト人男性にはとても感銘を受けました。彼は私が出会ったムスリムたちとは一線を画す人物で、彼の信仰は非常に強いものでした。私は職場のムスリム男性との確執があったため、そのことの相談相手として彼のような人物を必要としていました。私は怒りにまかせてすべてをイスラームのせいにしてしまいましたが、彼は忍耐強く、それがイスラームのせいではないこと、そして全てのムスリムたちがそのような態度を取るのではないことを説明して分かせてくれました。

欧米人たちが他に言う事としては、全てのムスリムたちは非ムスリムへの布教にやっきで、洗脳しようとしてくるということでした。それゆえ、誰かがイスラームについて語ってくると私は非常に用心深くなり、彼らとの間に壁を作り、彼らが何を言おうが受け流すことにしていました。しかしエジプト人ハーリドに関しては、私が先に言及したり、何かを誤ってイスラームのせいにしてしまったりしない限りは決してイスラームについて話したりはしませんでした。また、私は彼に対し、全くイスラームとは関係のないことについて不正に暴言を吐いたりしたものでした。彼は常に平静を保ち、とても忍耐強く、ただ単に私に真実を知って欲しがっていたことは明白でした。彼はただ、私が不公平だったこと、そして間違った情報を信じ込まされていたことを私に気付かせただけなのです。

そしてラマダーン月になりました。職場のサウジ人男性たちは「食べ物のにおいがするぞ、君たちは職場で食べるべきではない、私たちへの敬意をもっと示すべきだ」と不平不満を述べ連ねました。私は机の上に水が入ったグラスを置くことすら出来ないことへの理解に苦しみました。結局、彼らは神への犠牲を払うべきなのであり、私の机の上に水があったとしても気に留めるべきではないのです。以下の私の日記からの抜粋は、ラマダーンの始まりに私がどう感じていたかをよく示していると思います。

「ラマダーン。ああ、何という一ヶ月なのかしら。本当に腹がたつわ。『食べ物』という言葉さえ使っちゃいけないのよ。彼らは皆、たいそうな殉教者であるかのように振る舞い

だすけど、仕事すらしていないわ。一晩中食べ明かし一日に6時間しか働かないくせに、私たち皆を完全に不信心者扱いするのよ。」

友人のハーリドはきちんと説明してくれました。ラマダーンでは深夜の礼拝に励んだり、善き素行に努めてみだらなことや不平不満を言わないこと、陰口をたたかないこと、喜捨をたくさんすることなどについて説明しました。彼によれば、一部の欧米人は断食がどんなものを好奇心から試してみますが、それに大満足して毎年やっている人もいます。ある朝、私は断食してみることを決意しました。私は当初、そのことをハーリドはもちろん誰一人として告げていませんでしたが、しばらくすると彼に気付かれてしまいました。

ある日、彼のところにいると、彼は私に読んで欲しい物があると言ってきました。彼はクルアーン写本のイエス（彼に平安あれ）に関する章句を私に見せ、まるで貴重な宝石を渡すかのようにそれを私の両手にそっと置きました。私は圧倒されてしまいました。別にそれを彼に返したかった訳ではありませんでしたが、もし私がどのように感じていたかを彼に言えば笑われることを恐れ、尻込みしてしまいました。なので結局彼に返したのですが、彼がようやく「クルアーンを読んでみたらどうだい？」と切り出すまで、そのことは何日も私の中でくすぶり続けていました。そのときはまるで背中から重荷が降りたように感じ、私はそれを家に持ち帰り、その日の夜から読み始めたのです。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/114>

Copyright © 2006-2013 [www.IslamReligion.com](http://www.IslamReligion.com). All rights reserved.